

第68回国立民族学博物館運営会議議事要旨

日 時 令和5年7月6日（木）13:30～17:00

場 所 国立民族学博物館第1会議室

出席者

（館外） 岡田、木川、窪田、後藤、高倉、富沢の各委員

（館内） 飯田、宇田川、韓、岸上、園田、日高、福岡、南の各委員

（陪席） 吉田館長、猿渡管理部長、一鷗総務課長、小野研究協力課長、
馬場財務課長、前原企画課長、北條情報課長

（事務局） 河野総務企画係長、岩橋総務企画係員

議事に先立ち、岸上議長から、本会議は、国立民族学博物館運営会議規則第5条第1項及び第3項による成立要件を満たしている旨の説明があり、総務課長から配付資料の確認があった。続いて、岸上議長から、新たに着任した運営会議委員の紹介があった。

議 事

1. 会議の運営について

（1）専門委員会委員の指名報告

岸上議長から、国立民族学博物館運営会議規則第7条第2項に基づき、運営会議議長が指名した館長候補者選考検討委員会委員の報告があった。

・館長候補者選考検討委員会の館外委員：窪田委員、高倉委員、富沢委員

（2）館長挨拶

吉田館長から、第68回国立民族学博物館運営会議（令和5年度第1回）開催にあたり、挨拶があった。

（3）前回議事要旨（案）の確認について

岸上議長から、資料1に基づき、第67回国立民族学博物館運営会議（令和5年3月3日開催）の議事要旨（案）の確認が行われ、原案どおり承認された。

2. 協議事項

（1）令和5年度共同研究について

宇田川委員から、資料2に基づき、令和5年度共同研究申請新規採択課題一覧について説明があり、審議の結果、一般・館内1件、一般・公募1件、ならびに若手1件の採択について承認された。

3. 報告事項

（1）人事異動について

総務課長から、資料3に基づき、前回開催の運営会議以降の人事異動について、報告があった。

（2）人事委員会について

岸上議長から、資料4に基づき、令和5年6月5日及び6月21日にウェブ開催された人事委員会について、報告があった。

(3) 共同利用委員会について

宇田川委員から、資料5に基づき、令和5年3月23日、5月19日、6月6日にメール開催、6月29日及び6月30日に開催された共同利用委員会について、報告があった。

(4) 館長候補者選考検討委員会について

岸上議長から、資料6に基づき、令和5年6月28日にウェブ開催された館長候補者選考検討委員会について、報告があった。

(5) 研究資料共同利用委員会について

岸上議長から、資料7に基づき、令和5年3月23日にウェブ開催された研究資料共同利用委員会について、報告があった。

(6) 人間文化研究機構の動きについて

岸上議長及び財務課長から、資料8に基づき、以下の報告があった。

①令和5年度人間文化研究機構理事等の業務分掌について

岸上議長から、令和5年度人間文化研究機構理事等の業務分掌について、報告があった。

②人間文化研究機構令和5年度予算について

財務課長から、令和5年度人間文化研究機構予算編成方針及び当初予算配分について、報告があった。

③令和5年度機構長裁量経費（要望分）の配分について

財務課長から、令和5年度機構長裁量経費（要望分）の配分について、報告があった。

(7) 国立民族学博物館の動きについて

1) 令和4年度自己点検報告書について

宇田川委員から、資料9に基づき、令和4年度自己点検報告書について、報告があった。

このことについて、館外委員から寄せられた主な意見等は次のとおりであった。

- ・自己点検評価は担当者によって評価基準が少々異なると想像される。担当者において評価した結果のままなのか、担当者間で説明がなされ、全員が納得の結果なのか、決定のプロセスを知りたい。
- 本館の自己点検・評価委員会において評価が適切であるか議論をしており、自己点検・評価委員会の総意となっている。
- ・共同研究はコロナ禍においてオンライン・ハイフレックス・ハイブリッドでの開催が進んだが、今後は対面での開催のみとするのか。あわせて、共同研究は国内在住の研究者に限られてきたが、オンライン開催を可とし、海外在住の研究者も参加できるようにするのか、今後の展開を知りたい。
- 本館の様々な研究の中で共同研究会はどうあるべきか、開催方法も含め、共同利用委員会において整理していきたい。
- ・博物館はこれから何を目標せばよいのか常に考えている。ユニバーサル型メディア展示の構築事業の自動走行型電動車椅子の今後を見守りたい。
また、国際協力研修事業のテーマが「博物館とコミュニティ開発」となっていて、地域社会に果たす役割を掘り下げて考えているところが素晴らしい。
- 自動走行型電動車椅子は、博物館を訪れにくい方を想定したときにでたアイデアである。車椅子に座ると視線が変わるので、健常者にも新鮮な感動を与えることができると考え

ている。博物館は「豊かな社会を凝縮した空間」であるから、実装する機器類は現実社会への提言になるようにしたいと考えている。

→国際協力研修事業は1994年に始まったもので、テーマについては、参加者のニーズを取り入れ、博物館のトレンドを調べ、適宜検討しているものである。

・特別研究には統一テーマがあるが、各プロジェクトの有機的な連関をどのようにしているのか。第3期には6つの国際シンポジウムをしたことでどういうことが言えるようになったのかを知りたい。あわせて、第4期において有機的な連関の取り組みはあるか。共同研究については、共同研究会が終わった後の評価をもう少しきちんとしたほうが良いのではないか。

→第4期は、各プロジェクトの代表者により総括班を運営している。最終的に全体をまとめあげシンポジウムを開催することを目標にしている。

・国際協力研修事業にも興味がある。具体的なカリキュラムを知りたい。

→博物館の活動をすべてカバーするようにカリキュラムを作っている。本館の人員だけで不足する場合は、外部の専門家の協力も得て、なるべく広く博物館活動の全体像がわかるようにしている。

・自己点検報告書には、大学の評価で肝になる項目、情報、例えば国際的にインパクトがある研究（Top 10%論文）、寄附額）などが不足している。逆に、人間文化研究機構には、文系の大学等の評価モデルとなるような、Top 10%や寄附額に代わる量的指標を掲げてほしい。また、大学共同利用機関法人としての機能を果たすために予算をどのように使ったかを明確にすべきである。

共同研究については成果がどうだったのか、論文を評価する仕組み、本を出版する場合はその本を評価する仕組みが必要である。共同研究の評価については、外部資金とマッチングしている場合は、そのことも評価すべきである。

民博の情報化対応は大変素晴らしいので、積極的に発信してはどうか。やっていることが情報発信されていないように感じており、学会で発表をしていくのはどうか。

国際協力研修事業について、大阪府堺市にIRCI（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）があり、似たような事情を持った海外の研究者が来ていることから、連携できるのではないか。

→本館の映像資料について、自身が所属する東洋音楽学会ではストリーミング配信するなどして認知されたが、文化人類学会において情報発信を強化していく。

→ACCU奈良（ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所）に協力して本館を見学してもらったことがあり、IRCIと断片的な関わりができつつあることから、全面的な連携もできるのではないか。

→それぞれの研修に共通点はあるが、IRCI、ACCUではトピックを限定し、期間の短い研修で、問題意識が少し違う所にある。しかしながら、協力の可能性はあるので、それぞれの特色を生かしながら連携できるのではないか。

→本館の研究成果を文化人類学会で発信することは重要である。本館が英語のみならず多言語で研究成果を発信している事例を文化人類学会で発表したことがあり、中国の人類学会、食文化研究会でも発信した。中国の大学院で、オンラインで公開している本館の所蔵資料の情報が活用されていることを紹介する。

・別の機関でも共同研究の応募数が落ち込んでいるときいている。共同研究はその機関の特色ある研究ができる重要な枠だと思うので、外部資金との関連も考えながらやっていると、その資金を活かし、研究を発展させていけるのではないか。

・産学連携とともに官学連携も重要である。文化庁が京都へ移転したことから、文化政策を展開していくことがあるのか。文化庁の移転が関西の大学等機関へどのような影響を

及ぼすのか関心がある。

- ・共同研究、受託研究及び受託事業の受入資金について、民博全体の予算に占める割合が少ない。研究や社会貢献のポテンシャルが高い人材が集まっているのに件数が少ないのはどうしてか。民博から外部へのアピールが足りないのか、受入れすることに何か制限があるのか。

→受託研究等はテーマを指定されることから、あえて取りにっていない。

→共同研究、受託研究及び受託事業という文言に固執したために漏れがあるので、実態に合致するように修正していきたい。

昨年度、自己点検報告書の仕様を改め、ファクトブックとワンセットとで民博の全体像を示すこととした。今年度は仕様変更の2年目になるが、報告すべき事項として研究成果の発信が欠落していることに気付いた。ファクトブックは秋に完成するが、ご意見を今年度の運営に反映させていきたいと考えているため、運営会議委員には自己点検報告書をできるだけ早くお示ししている。

→この時期に民博の全体像をお示しするのは難しいが、できる限り対応したい。今回の指摘を含め、ファクトブックの中身自体を見直し、作成していきたい。

- ・遠慮や漏れは評価されないし、評価の様式は一度出来上がると再生産されてしまうので、折に触れて修正バージョンを作成していく必要がある。

→外部評価委員からファクトブックが見にくいという意見もあり、指標の在り方を見直したい。機構全体においてもアピール度が低いと指摘を受けていることから、こちらでどういう指標が必要か、意見を伺いながら改善していきたい。

→民博の産学連携の特徴は、理系とは異なり、開発されたものがより人に優しい使い方になるにはどうすれば良いかというような官能評価に関わるものである。文系ならではの産学連携の新たな方法を示している。

引き続き、各委員等から、資料10から18に基づき、以下の報告があった。

- ・宇田川委員から、評価及び学术交流協定の締結について
- ・園田委員から、入館者数等について
- ・岸上議長から、本館の活動状況及び新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付け変更後の本館の対応について
- ・吉田館長から、受賞について
- ・南委員から、総研大について
- ・財務課長から、令和6年度概算要求について
- ・猿渡管理部長から、令和4年度監事監査について

2) 国立民族学博物館をとりまく動きについて

吉田館長から、資料19に基づき、次の事項について報告があった。

- ・内部監査室の組織化と機能について
- ・第4期中期目標・中期計画における意欲的な評価指標の指定について
- ・人間文化研究創発センター研究員の採用について
- ・新任教員の紹介